

管内農作物の生育状況 十勝総合振興局発表					
9/1現在	区分	本年	平年比	評価	遅早
ジャガイモ	上いも数	11.3個/株	96%	平年並み	遅1日
	上いも個重	86.8g/個	97%	平年並み	
ビー ト	収穫	2.5%	—	—	遅7日
	根 周	34.4cm	101%	平年並み	±0日
大 豆	草 丈	69.8cm	92%	やや短い	
	葉 数	10.5枚	97%	平年並み	遅4日
	着莢数	517.0個/㎡	89%	少ない	
小 豆	草 丈	58.3cm	95%	やや短い	
	葉 数	11.0枚	99%	平年並み	遅4日
	着莢数	340.6個/㎡	100%	平年並み	
金 時	草 丈	40.9cm	79%	短 い	
	葉 数	4.1枚	99%	平年並み	遅4日
	着莢数	116.1個/㎡	84%	少ない	
手 亡	草 丈	35.1cm	62%	短 い	
	葉 数	7.1枚	90%	少ない	遅5日
	着莢数	190.1個/㎡	80%	少ない	
牧 草	2番収穫	7.4%	—	—	遅11日
	飼 料 用 トウモロコシ	稈 長 244.4cm	88%	短 い	遅5日

ビー ト 平年並み

ビー トは平年並み。2 番牧草の収穫の進捗率は7.4%で、平年より11日遅れている。同課は「でんぷん用などジャガイモの晩生種やビー トは病害防除を継続して行ってほしい」としている。

また道農政部のまとめによると、台風10号による管内の農業への影響はこれまで、更別、上士幌、鹿追、浦幌、豊頃 の 5 町村で大雨による畑の浸水、作物の倒伏が計3505ヘクタールあると報告された。作物では豆類やジャガイモ、スイートコーン、デントコーンなどの畑が影響を受けた。

農業ガイド1078号

2016年10月8日

大豆作付け43%増9805ヘクタール ビー トも 2 年連続増 16年産

道農協畑作・青果対策本部は、2016年産の畑作物作付実績面積をまとめた。管内では、豆類が小豆などで減った一方、国産需要の増加を背景に大豆が9805ヘクタールで前年比43%（2928ヘクタール）増となった。ビー トも323ヘクタール増え、前年に続いて2年連続の増加となった。

J A道中央会などが7月1日現在で調査した。管内では小豆や菜豆が、近年の豊作で在庫が豊富な需給環境や低水準な相場を受けて減少。一方で大豆は、国産大豆の需要が広がる中で大きく増えた。

小麦は、主力となる日本用（秋まき小麦）の品種が

同5%（1865ヘクタール）減の3万7075ヘクタールだった。パンや中華用は、秋まきが同28%（1103ヘクタール）増えて5034ヘクタール、春まきが同5%（29ヘクタール）増の611ヘクタールと増えた。

ビー トは15年産が11年ぶりに前年比プラスに転じるなど、経営所得安定対策で昨年産からビー トの基準糖度が引き下げられて手取り収入が向上し、農家の作付け意欲が回復しつつある。16年産もその傾向が続き、作付面積は2万6056ヘクタールで、同1.3%（323ヘクタール）の増となった。

15年産川西長いも 販売過去最高 初の70億円超

2016年11月1日

管内の8 J Aで生産する「十勝川西長いも」は、昨年春に植えた2015年産の販売額が、1日現在で70億6000万円に達して過去最高になった。相場が高値で安定し、輸出量も伸びて初めて70億円を超えた。

十勝川西長いもは、秋に全体の6割を収穫し、残りは土の中に置いたままにして翌春に掘り出すことで、通年出荷を実現している。15年産ナガイモの収穫量は平年よりやや多い約2万トン。うち15%程度を米国や台湾などに輸出した。

輸出は10億円突破

豊作だった14年産より収穫量は少なかったものの、国

内向け相場の平均が前年より17%程度高く推移。輸出も市場の大きな米国向けが伸び、販売額が初めて10億円を突破した。国内販売と輸出の相乗効果が表れた形だ。

15年産の出荷は今月上旬の海外向けを最後に終わるが、国内と輸出を合わせた販売額は、これまで最高だった14年産の67億円を既に上回った。J A帯広かわにしでは「良い単価が続いてくれたことで販売額が増えた。今年産（16年産）も販売戦略を立て、少しでも高い単価で推移してくれば」としている。